

「平家物語」中所見之死亡美學

- 以「灌頂卷」為中心 -

徐翔生*

摘要

日本中世盛行的軍記物語中，最負盛名的可謂「平家物語」。「平家物語」為何能夠成為中世最具代表性的文學作品？這部作品中最感人且最美之處為何？本文探討「平家物語」末卷「灌頂卷」中主角建禮門院的死亡，自當時盛行的佛教作品「往生要集」中，深究這部作品死亡思想之形成，並以淨土思想的往生概念，說明這部作品如何將死亡美化。期盼藉此研究，對中世日本人的死生觀有進一步理解，並對日本文化中所蘊含之死亡美學，從另一途徑做更深層之認識。

關鍵詞：「平家物語」、「灌頂卷」、建禮門院、「往生要集」、淨土思想、往生、死亡美學

『平家物語』に見られる死の美学 —「灌頂巻」をめぐる—

徐翔生*

要旨

中世日本で流行していた軍記物語の中で、『平家物語』をあげてジャンルを代表する作品だと言っても過言ではあるまい。何故『平家物語』が中世をもっとも代表する文学作品となっているのか、この作品が人々の共感と呼び、もっとも美しいところはどんな点であろうか。本論では『平家物語』の末尾の「灌頂巻」に書かれている建礼門院の死を取り上げ、当時盛んだった仏教の著作『往生要集』を合わせ述べながら、この作品に表われている死の思想、及びそのあり方について深く検討したいと思う。それと同時に、浄土思想における往生という観念を通して、この作品に描かれている死の美学をも究明してみたい。この論文が中世日本人の死生観を理解するのに、少しでも役立つことができれば幸いである。またこの研究を通じて、これまでとはまた別の視点から日本文化に流れている死の美学について、より深く認識できるようになればありがたい。

キーワード：『平家物語』、「灌頂巻」、建礼門院、『往生要集』、浄土思想、往生、死の美学

The Death Aesthetics in *Heikemonogatari*: *Kanchiomaki* as the Focus

Hsu Hsiang-Sheng*

Abstract

Heikemonogatari is regarded as the most renowned work of war literature flourished in Middle Age Japan. What makes *Heikemonogatari* the most representative literary piece in the Middle Age? What is the most touching and beautiful in this work? This paper aims to study the death of Kenreimonin, the protagonist of *Kanchiomaki*—the last volume of *Heikemonogatari*. By applying the popular Buddhist thoughts in *Oujyoyosyu* at that time, the writer analyzes the formation of ideas evolving death in *Heikemonogatari*; by using the concept of passing away in jyodo Buddhist philosophy, the writer explicates how death is aestheticized in *Heikemonogatari*. It is hoped that this study will first promote more understanding of the Japanese concept of death and life in the Middle Age, and second, offer another approach to the aesthetics of death in Japanese culture.

Key words: *Heikemonogatari*, *Kanchiomaki*, Kenreimonin, *Oujyoyosyu*,
jyodo Buddhist philosophy, passing away, the death aesthetics

『平家物語』に見られる死の美学 — 「灌頂巻」をめぐって—

徐翔生

中世の日本文学と言え、おそらくまっさきに軍記物語を連想する人が多いであろう。『保元物語』、『平治物語』、『源平盛衰記』、『義経記』、『太平記』など、平安時代末期から鎌倉時代の初期にかけて、貴族階級の没落、武士階級の抬頭、及び当時の政治、戦乱を主題とした軍記物語は、時代の政治動向の変遷、合戦に伴った長期の動乱や不安を反映しており、この時期におけるもっとも代表的な文学作品と言えよう。そして数多くの軍記物語の中で、『平家物語』をあげてジャンルを代表する作品だと言っても過言ではあるまい。では『平家物語』はいったい何を語っているのだろうか。何故この作品が中世をもっとも代表する文学作品となっているのか、そしてこの作品が人々の共感を呼び、もっとも美しいところはどんな点であろうか。

『平家物語』はあまりにも有名な作品であるため、この作品に関する著作はかなり多く、その思想についての研究も少なくない。これまでの『平家物語』に関する研究書をいくつかあげてみれば、たとえば佐々木八郎は『平家物語評講上・下』（明治書院）で、この作品を丁寧に解釈し、その中の思想形成を詳しく説明している。作者は『増補平家物語の研究』（早稲田大学出版会）で、さらにこの作品の成立や性格などを考慮しながら、『平家物語』における時代的な意義及びその影響を解説している。富倉徳次郎の『平家物語全注 積上・下巻』（角川書店）にあつては、『平家物語』の諸伝本を比較しながら、その相違を説明し、さらに当時の史書『吾妻鏡』、藤原兼実の日記『玉葉』などを取り上げ、『平家物語』の史実性を説いている。そして近年では、福田晃、佐伯真一、小林美和校注の『平家物語上・下』（三井弥書店）が、この作品の内容に新しく解釈を加えている。

この二冊本は『平家物語』にとって比較的新しい注釈書である。

以上は日本文学研究の方面から行われた『平家物語』に関する研究であるが、一方、宗教学、日本思想の立場から行われた『平家物語』に関する著書、論述なども見られる。例をあげてみれば、大野順一は『平家物語における死と運命』（創文社）において、自然、穢土、不思議という三つの観点から、この作品における死の問題を解明している。梅原猛の『地獄の思想』（中央公論社）では、仏教の六道の思想を叙述しながら、『平家物語』における修羅の世界が説かれている。これに対して、相良亨は『日本人の死生観』（ペリカン社）において、運命と連帯感という考え方から、『平家物語』における死の表現を論述している。高島元洋の「近世武士における死と時間の意識」（『日本思想4時間』所収、東京大学出版会）では、武士の戦場における死の諸相を取り上げながら、『平家物語』における死の意義を解明している。以上あげた書物はそれぞれ独特な見解があるため、『平家物語』の思想を理解しようとする際、欠かせないものだと思われる。

ところが、『平家物語』に見られる死の美学に関する研究はそれほど多くない。特にこの方面から「灌頂巻」を取り上げ、それを論じているものはほとんど見られない。言うまでもなく、今まで「灌頂巻」に関する研究はたくさんある。しかしこれまで「灌頂巻」について論ずる場合、しばしば論及されたことは「灌頂巻」の成立、または「灌頂巻」と仏教との関係である。山田孝雄の『平家物語考』（勉誠社）をはじめ、渥美かをるの「平家物語灌頂巻成立考」（『平家物語』所収、有精堂）や、小林智昭の「平家物語と仏教」（前掲書）などはその一例である。そこで私は「灌頂巻」をめぐる、その中に表われている死の美学を論じようと考え、この論文の執筆を試みた。

本論では哲学的な立場からのアプローチはせず、宗教学の理論に触れることもしない。『平家物語』の末尾の「灌頂巻」を取り上げ、その中に表われている死の思想、並びに描かれている死の様相を掘

り下げることによって、その死生観の形成及びそのあり方を深く検討したいと思う。この論文が中世日本人の死生観を理解するのに、少しでも役立つことができれば幸いに思う。それと同時に、この研究を通じて、日本人の心に潜んでいる死の思想、並びに日本文化に流れている死の美学について、より深く認識できれば嬉しく思う。これこそが本論のねらいである。それではまず『平家物語』はいったい何を語っているのか、ということから述べてみることにしよう。

1.

『平家物語』はその名前から分るように、平家一門の興亡を中心に書かれたものである。「桓武天皇第五の皇子、一品式部卿葛原親王、九代の後胤讚岐守正盛が孫、刑部卿忠盛朝臣の嫡男なり」(巻第一「祇園精舎」)¹とある通り、主人公である平清盛は、桓武天皇の第五の皇子の葛原親王から九代の子孫に当る平正盛の孫で、平忠盛の子である。祖父平正盛の代まではまだ諸国の受領でしかなく、父忠盛の代にようやく昇殿を許された。そして平清盛は保元、平治の乱を経て官位が進み、太政大臣従一位にまで昇進した。この作品は平家の祖先平忠盛より説き起し、主人公平清盛、そして清盛の長男重盛、次男宗盛、三男知盛、四男重衡、娘の建礼門院、さらに重盛の嫡子維盛、資盛、清経、維盛の嫡子六代などが次々に語られ、平家がいかに勃興し、全盛時代に入り、そしてこの一門がいかに栄華から没落し、やがて破滅に至ったか、一部始終が記述されている。この本はもとより琵琶法師が琵琶を弾きながら語ったものであったが、のちに度重なり伝承が増補されて、とうとう十三卷一九二節にも至る大作となった²。ところでこの大作『平家物語』における主旨とは、いったい何であろうか。

¹本論では『平家物語』からの引用は、『覚一本』系の高野本を底本とする新日本古典文学大系『平家物語上・下』(岩波書店、一九九一年六月出版)によるが、適宜表記を改めたところがある。以上、新日本古典文学大系『平家物語上』(岩波書店) 5-6頁。

²『覚一本』の『平家物語』が本卷十二卷と別巻と見るべき「灌頂卷」一卷から成立していることから、本論では『平家物語』を全部で十三巻と見ている。

『平家物語』はその巻頭の名文に示されているように、「諸行無常」と「盛者必衰」のことわりを語ったものである。ではその冒頭は何を語っているのか、それはまたどんな意味を表わしているのか、ここで少し原文を引きながら述べてみよう。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす。奢れる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高・漢の王莽・梁の周伊・唐の禄山、是等は皆旧主先皇の政にも従はず、樂みをきはめ、諫をも思ひいれず、天下の乱れむ事をさとらずして、民間の愁る所を知らざっしかば、久しからずして、亡じにし者ども也。近く本朝をうかゞふに、承平の将門・天慶の純友・康和の義親・平治の信頼、此等は奢れる心もたけき事も、皆とりどりにこそありしかども、まちかくは六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申し人のありさま、伝うけ給るこそ、心も詞も及ばれね。」(巻第一「祇園精舎」)³

以上あげたのは『平家物語』の巻頭に置かれた「祇園精舎」の冒頭部である。ここで作者は中国における盛者であった趙高、王莽、周伊、禄山の例をあげ、彼らがみな「旧主先皇の政にも従はず、樂みをきはめ、諫をも思ひいれず、天下の乱れむ事をさとらずして、民間の愁る所を知らざっし」ために、まもなく亡びてしまったことを説明している。それだけではなく、作者はさらに日本の承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼などの例を取り上げて、これらの人も「奢れる心もたけき事も、皆とりどりにこそありしか」ために、やがて滅亡してしまったことを述べている。それとの関連において、この本の主人公である六波羅の入道、前太政大臣平清盛は「伝うけ給るこそ、心も詞も及ばれね」というありさまで、「奢れ

³新日本古典文学大系『平家物語上』(岩波書店) 5頁。

る人も久しからず」、「たけき者も遂にはほろびぬ」と、その一門としての運命がすでに衰退し没落せざるをえなかったこととされている。

『平家物語』が平家一門の衰退没落を語ることを本旨とする以上、作品中には平家の全盛から滅亡に至るまでの源氏との合戦の顛末が描出される。源平の合戦及び平氏の敗戦にしたがって、平家の人々のみならず、源氏の人々をも含めて、『平家物語』においては、死を描く場面がかなり多く、死についての描写もしばしば見られる。たとえば巻第七には、武蔵国の住人斉藤真盛のことが書かれている。寿永二（一一八三）年、平氏が篠原の合戦に惨敗したので、真盛は逃走した平家の味方を目にかけて、ただ一騎引き返し、引き越して防戦する。真盛はもう七十歳を過ぎて、白髪になってしまっていたが、すでに死の覚悟ができていた彼は、戦場で老醜をさらさないようにするために、赤地の錦の垂直を着て、老いの鬢鬚を黒く染めて戦場に向かう。『平家物語』では真盛の最後を「朽もせぬ、むなしき名のみとゞめをきて、かばねは越路の末の塵となるこそかなしけれ」（巻第七「真盛」）⁴と語っていて、その死のありさまを「朽もせぬ、むなしき名」と述べている。この朽もせぬ、むなしき名を重んずるが故に、真盛は戦場において死を恐れずに戦うのである。

そして元暦二（一一八五）年、源氏と平氏は壇の浦で決戦することとなった。この合戦が始まる前に、平清盛の四男知盛は「運命尽きぬれば力及ばず。されども名こそおしけれ。東国の物共によはげ見ゆな。いつのために命をばおしむべき。これのみぞ思ふ事」（巻第十一「鶏合壇浦合戦」）⁵と、大音声をあげて味方の者を励ます。しかしこの合戦の敗北で、平家の勢力挽回への可能性が絶望的になり、もはや滅亡する運命と分った時、知盛は「見るべき程の事は見つ。いまは自害せん」（巻第十一「内侍所都入」）⁶と言って、乳母子の平

⁴新日本古典文学大系『平家物語下』（岩波書店）26頁。

⁵前掲書、287頁。

⁶新日本古典文学大系『平家物語下』（岩波書店）300頁。

内左衛門家長と手を取り組んで海へ投げる。知盛の「見るべき程の事は見つ」とは、自分は最後まで平家の運命的な没落を見きわめたとの意であろう。よって、それを見とどけて後に知盛は自害するのである。

すでに何人かの学者にも指摘されているように、先に述べた真盛は「名」のために死ぬが⁷、平知盛は「運命」のために死ぬと言われている⁸。つまり真盛は「朽もせぬ、むなしき名」を得ようと望んでいたために、戦場で死ぬが、知盛は自分の運命がついたことを理解したために自害するのである。しかしたとえその死ぬ目的も死の意義もそれぞれ異なるとは言え、作品の上では死がすべて高く評価され、その死にざまは立派である。逆に死を恐れて、死ぬ機会をのがれ死ねなかった人、もしくは死のうとしなかった人の場合、『平家物語』はとても低く見て、大いに軽蔑している。

たとえば平清盛の弟である平頼盛は、寿永二（一一八三）年平家の都落ちに際して、一門の逃避行から脱落して都に引き返した。都に引き返した頼盛はのちに源頼朝を頼って生き残ることとなった。平家の人々は頼盛を「年来の重恩を忘れて、今此ありさまを見果てぬ

⁷高島元洋は「近世武士における死と時間の意識」において、『平家物語』から斎藤真盛、茅野太郎光広、河原太郎などの例を取り上げ、彼らが「名」のために死ぬことを述べている。つまりこれらの人は「むなしき名」、「死後の名」といった「朽もせぬ」名を得ようと望んでいたために、戦場で死を恐れぬほど戦うのである。特に真盛はこのような「朽もせぬ」名を重んずるがゆえに、戦場で死ぬのである。以上、高島元洋「近世武士における死と時間の意識」（『日本思想4時間』所収、東京大学出版会）238-241頁を参照。これと同じような解釈は、松尾葦江「平家物語の死生観」（『文学における死生観』所収、笠間書院）にも見られる。

⁸相良亨は『日本人の死生観』において、次のように述べている。『平家物語』の中では、「運命が末になる」、「運命がつきる」、「運命が開ける」というように、「運命」という言葉がよく出ていて、運命はこの物語を強く貫くものであり、『平家物語』の基調であるとも言える。そして『平家物語』の主人公たちはみな運命が末になった、あるいはつきた平家の運命のために死ぬとも考えられる。たとえば知盛が「見るべき程の事は見つ。いまは自害せん」と言ったのは、すでに己の運命がついたことを理解し、平家の人としてののがれえない運命のためである、と相良亨は解釈している。以上、相良亨『日本人の死生観』（ペリカン社）47-78頁を参照。なおこのような解釈は、大野順一『平家物語における死と運命』（創文社）、石母田正『平家物語』（岩波新書）などにまで溯ることができよう。

不当人」(卷第七「一門都落」)⁹と責めて、一矢射るべきだと言う者もいた。そして平清盛の三男であり、平家の統率者であった平宗盛は壇の浦の合戦で源氏に負けたために、息子清宗とともに海に身を投げたが、この父子は死ぬ気がなかったので、浮き沈みしているうちに源氏に捕えられてしまった。生虜となった宗盛は自分の身を捨てがたく、また命を惜しく思い、虜囚の恥を受けても爪弾きを受けても源頼朝を頼った。結局この父子はやはり引き離され、別々のところで首を斬られた。『平家物語』では、平宗盛のことを「猛虎深山にある時は、百獣ふるひおづ。檻井のうちにあるに及、で、尾を動かして、食をもとむ」(卷第十一「大臣殿被斬」)¹⁰と非難し、その一生を「いきての恥、死んでの恥、いづれもおとらざりけり」(同卷・同上)¹¹と、恥が多いと語っている。

ここで一言しておきたいことがある。最後の合戦の場所が海上であったために、『平家物語』においては、数多くの入水自殺の場面が描かれている。これらの入水自殺はいずれも特別な感慨と感傷を伴い、とても印象的である。このような死に方はほかの軍記物語にあまり見られず、『平家物語』における一種特殊な死の表現とも言えよう。例えば寿永二年(一一八三)年、平家は源氏のために都を攻め落とされ、九州から追い出された時、その一門の運命にすでに絶望した平重盛の三男清経は「いづくへゆかばのがるべきかは。ながらへはつべき身にもあらず」(卷第八「太宰府落」)¹²と言って、海に身を投じて死んでいる。清経が死んでからまもなく、寿永三(一一八四)年、その兄維盛は「還来穢国度人天」(卷第十「維盛入水」)¹³を耳に留めて、熊野で入水した。そして前節でも述べたように、壇の浦合戦の後、知盛は「見るべき程の事は見つ。いまは自害せん」(卷第十一「内侍所都入」)と言って、乳母子と手を取り組んで海に

⁹新日本古典文学大系『平家物語下』(岩波書店) 55頁。

¹⁰前掲書、327頁。

¹¹前掲書、331頁。

¹²前掲書、84頁。

¹³前掲書、241頁。

入った。「是を見て、侍共廿余人おくれたてまつらじと、手に手をとりにくんで、一所に沈みけり」（同巻・同上）¹⁴と、これを見た平家の武士たち二十余人がおくれ申さじと、手に手を取り組みいっしょに海に沈んだ。以上のように、『平家物語』における入水自殺の事例は枚挙にいとまがない。その中でも特に、平家一門の最後を決定づけた安徳天皇の死がもっとも印象深いものであろう。

元暦二（一一八五）年、壇の浦で源氏の軍兵がすでに平家の船に乗り移ったので、平家にはもはや勝ち目がなくなった。このようすを見て、平清盛の妻二位の尼は敵の手にかかるまいと思い、安徳天皇を抱き入水しようとした。その時、安徳天皇は自分をどこへつれて行くつもりかとたずねた。二位の尼は泣きながら、「この国は粟散辺地とて、心うきさかゝにてさぶらへば、極楽浄土とて、めでたき処へ具しまいらせさぶらふぞ」（巻第十一「先帝身投」）¹⁵と言ひ、さらに「浪のしたにも都のさぶらふぞ」と慰めた。このように、わずか八歳であった安徳天皇は「ちいさくうつくしき御手をあはせ、まづ東をふしおがみ、伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、其後西にむかはせ給ひて、御念仏ありしかば」（同巻・同上）¹⁶と、小さい手を合わせ、東を拝み、西に向かって念仏しながら二位の尼に抱かれ、壇の浦に身を投げて死んだ。おそらくこの幼い天皇の悲しい死に、感歎しない人は一人もいないであろう¹⁷。

さらに安徳天皇の入水自殺のあと、維盛の嫡子六代、及び残党を処分した顛末が書かれ、それにひきつづいて、「灌頂卷」が置かれて

¹⁴新日本古典文学大系『平家物語下』（岩波書店）300頁。

¹⁵前掲書、294－295頁。

¹⁶前掲書、295頁。

¹⁷『平家物語』の中では、安徳天皇が二位の尼に抱かれて入水したと書かれているが、その期日が書かれていない。鎌倉幕府の事跡を記した史書『吾妻鏡』では、その「元暦二年三月二十四日の条」に、安徳天皇入水のことを次のように書かれている。「廿四日丁未。於長門國赤間關壇浦海上。源平相逢。各隔三町。艘向舟船。平家五百余艘分三手。以山峨兵藤次秀遠并松浦黨為寺大將軍。挑戰于源氏之將帥。及什剋。平氏終敗傾。二品禪尼持寶釧。按察局奉抱先帝。共以没海底。」（『吾妻鏡』第四「文治元年三月」）。以上のように、安徳天皇が入水したのは元暦二年三月二十四日のことであった。そして安徳天皇を抱いて海に投じたのは二位の尼ではなく、按察局であったようである。以上、国史大系『吾妻鏡第一巻』（吉川弘文館）143頁を参照。

いる。このような新たな展開によって、読者の関心が安徳天皇の入水自殺からまた別の方向へ導かれ、その自殺へのこだわりを薄めると同時に、その死については深く考える余裕もなくなり、吟味することもできなくなる。それと対照的に、建礼門院を主役にした「灌頂巻」では、彼女の往生を述べたあと、この作品はすぐに幕を閉じる。「灌頂巻」は『平家物語』における最後の一巻であるし、その中に描かれている建礼門院は平家一族で生き残った最後の一人の女性であるから、彼女の死はすなわち平家一門がすべて死に絶える、ということの意味している¹⁸。だからここまで読むと、何とも言えない哀しみが出てきて、読者に特に深い印象を持たせて、忘れがたいものとなっている。では「灌頂巻」とは何であろうか、何故この「灌頂巻」は人々に感傷、同情を催させ、より深い印象を与えるのか。

2.

「灌頂」とは、頭頂に水を灌ぎ、その人物がある位に進んだことを証明する儀式のことである。仏教では最後の修行を終えた菩薩が悟りを開いて仏になる時、諸仏から智水の灌頂を受けて成仏する時の修行を「灌頂」というのである¹⁹。仏教用語の「灌頂」から書かれた「灌頂巻」は、建礼門院の一生を物語るものである。平清盛の娘である建礼門院は、高倉天皇の皇后であり、安徳天皇の母であった。建礼門院は「十五にて女御の宣旨をくだされ、十六にて后妃の位に備り」、「廿二にて皇子御誕生、皇太子にたち、位につかせ給」（灌頂巻「女院出家」）²⁰たので、若い頃は「玉の台をみがき、錦の帳にまとはれて、あかし暮し」（同巻・同上）²¹と思われる生活をした。前節にも述べたように、壇の浦合戦の敗北で安徳天皇は二位の

¹⁸『平家物語』の諸伝本は、共通して維盛の嫡男六代が斬られたことを語った後、その最終巻をしめくくっている。しかし本論で扱っている『覚一本』では、この物語の結末は六代物語ではなく「灌頂巻」であるために、『平家物語』全体が建礼門院の往生で終わっているとも言えよう。

¹⁹「灌頂」についての解釈は、「世界宗教大事典」（平凡社）423頁を参照。

²⁰新日本古典文学大系『平家物語下』（岩波書店）390頁。

²¹新日本古典文学大系『平家物語下』（岩波書店）389頁。

尼に抱かれて入水したが、その時建礼門院もいっしょに壇の浦に身を投げた。ところが、「渡辺党に源五馬允むつる、たれとは知りたてまつらねども、御ぐしをくま手にかけてひきあげたてまつる」（巻第十一「能登殿最期」）²²というように、建礼門院のみは源氏の武士源五馬允眠に助けられて死ななかつた²³。その後、都に帰還してからは東山の麓の吉田へ移り、そのあたりの朽ちた僧坊に住み、あらゆる人々も別れて、みじめな生活をしはじめた²⁴。

文治元（一一八五）年五月、建礼門院は剃髪して仏門に入り、出家循世の生活をはじめた²⁵。そして同じこの年の九月に、建礼門院はさらに大原山の奥の寂光院に移り、そこで人目を忍びながら暮らすようになった。「昔は玉楼・金殿に錦の褥をしき、たへなりし御すまゐなりしかども、今は柴引むすぶ草の庵、よそのたもともしほれけり」（灌頂巻「大原入」）²⁶と、昔は「玉楼・金殿」ですばらしい生活をした建礼門院は、今「柴引むすぶ草の庵」で哀愁の生活をしており、はたの見る目も涙でたもとが濡れるほどであった。以上が「灌頂巻」のはじめにおける「女院出家」及び「大原入」の大筋である。

文治二（一一八六）年、後白河法皇が大原の寂光院に赴いて、建礼門院と出会った。かつて権力者の娘で、天子の国母として、豪華な宮廷生活をしていた建礼門院は、今「住あらしめて年久しうなりにければ、庭には草ふかく、簷にはしのぶ茂れり。簾たえ閨あらはに

²²前掲書、296頁。

²³『吾妻鏡』の「元暦二年三月二十四日の条」に、入水した建礼門院は源五馬允眠に助けられたことが記されている。「建礼門院入水御之處。渡部黨源五馬允以熊手奉取之。」（『吾妻鏡』第四「文治元年三月」）というように、建礼門院が壇の浦へ投身したのを源五馬允眠が熊手にかけて引上げて助けられたのである。以上、国史大系『吾妻鏡第一巻』（吉川弘文館）143頁を参照。

²⁴建礼門院がいつ東山の麓吉田の朽坊に住んだか、その期日は『平家物語』に書かれていない。『吾妻鏡』では、その「元暦二年四月二十八日の条」に、「建礼門院渡御吉田辺」と記しているから、建礼門院がこの僧坊に入ったのはこの年の晩春初夏の頃であろう。以上、前掲書、152頁を参照。

²⁵平氏が壇の浦で滅びたのは元暦二（一一八五）年三月二十四日のことであるが、建礼門院の出家は同じ年の五月一日のことである。ただし元暦二年八月十四日に文治と改元したので、ここでは文治元年と書いてある。

²⁶新日本古典文学大系『平家物語下』（岩波書店）395頁。

て、雨風たまるべうもなし」(灌頂卷「女院出家」)²⁷という荒廃した所に住み、「軒には蔦藿はひかゝり、信夫まじりの忘草、瓢箪しばしばむなし、草顔淵が巷にしげし。藜藿ふかくさせり、雨原憲が枢をうるほす」(灌頂卷「大原御幸」)²⁸という貧しい粗末な生活をしている。そこで建礼門院は毎日「昼夜、朝夕の御つとめ、長時不斷の御念仏、おこたる事なくて、月日を送らせたまひけり」(灌頂卷「大原入」)²⁹、「よひよひごとのあかの水、結ぶたもともしほるゝに暁をきの袖の上、山路の露もしげくして、しぼりやかねさせ」(灌頂卷「大原御幸」)³⁰というような修行生活をしている。だから後白河法皇と出会った時、鬮伽の水を汲んだり、花を摘んだりしている建礼門院は、その袖がぬれていたというのである。建礼門院のこの悲しい涙の叙述に、かつて平家一門と敵対した後白河法皇も心打たれて、とめどなく涙を流して悲しんだ。これが「大原御幸」と題される章である。

そして後白河法皇との対面となった時、建礼門院は涙を流しながら自分の一生を回顧した。若い時、すべての人々は彼女に従い、すべてが彼女の思いのままであった。「清涼・紫震の床の上、玉の簾のうちにてもてなされ」(灌頂卷「六道之沙汰」)³¹というように、建礼門院は優雅な宮廷生活をして、「天上の果報も、是には過じ」と、いわゆる「天」の生活をした。ところが、寿永二(一一八三)年、木曾義仲に追われた平家は都落ちし、建礼門院は一門の人々とともに西海を漂う。この時から天上の楽しみは去り、建礼門院は「昼は漫々たる浪路をわけて袖をぬらし、夜は洲崎の千鳥とともになきあかし」(同卷・同上)³²という生活をして、「人間の事は、愛別離苦・怨憎会苦共に我身に知られてさぶらふ」(同卷・同上)³³と、「人間」

²⁷新日本古典文学大系『平家物語下』(岩波書店) 389頁。

²⁸前掲書、396頁。

²⁹前掲書、394頁。

³⁰前掲書、400頁。

³¹前掲書、402頁。

³²新日本古典文学大系『平家物語下』(岩波書店) 403頁。

³³前掲書、403頁。

の「四苦・八苦」をすべて経験した。

そして九州に逃げた同じこの年に、平維義などに筑前の国の太宰府を追い出され、平家の人々は船の中で日を送るようになった。船で暮らした平家の人々は飢餓に苦しめられて、「みつきものもなかりしかば、供御を備ふる人もなし」（同巻・同上）³⁴という生活を余儀なくされる。これがまた「餓鬼道の苦」であったと建礼門院は述べている。こうして元暦元（一一八四）年、平家は室山、水島などの戦いに勝ったので、人々はいくらか前途の希望が見えてきた。ところが、一の谷の敗戦で、平家一門の人々がたくさん亡くなり、それからというものも明けても暮れても戦いばかりで、「修羅の鬪諍、帝釈の諍も、かくやとこそおぼえさぶらひしか」（同巻・同上）³⁵と、いわゆる「修羅」の道に入ったのである。

そして一の谷を攻め落されて後、親は子におくれ、妻は夫に別れ、いくさの前途も見えたので、二位の尼は安徳天皇を抱いたまま海へ沈んだ。自分の子供の入水を見た建礼門院は、目もくれ、心も消えてしまって、忘れようにも忘れられず、たえようにもたえられない状態となった。あとに残った人たちのおめき叫ぶ声には「叫喚・大叫喚のほのほの底の罪人も、これには過じとこそおぼえさぶらひしか」（同巻・同上）³⁶と、自分がいわゆる「地獄界」にいたと言う。それから源氏の武士に捕えられて京に上る途中、播磨の国の明石の浦に着いた。建礼門院は少しうとうと眠った夢の中で、昔の皇居よりはるかにすぐれた所に、安徳天皇をはじめ一門の公卿、殿上人がいならぶのを見た。ここはどこかとたずねると、二位の尼らしい者が「竜宮城」と答えた。そして「竜畜経のなかに見えて侍らふ。よくよく後世をとぶらひ給へ」（同巻・同上）³⁷と、言われたところで、建礼門院は夢が覚めた。これがすなわち「畜生道」であったと言えよう。

³⁴前掲書、403頁。

³⁵前掲書、404頁。

³⁶前掲書、405頁。

³⁷新日本古典文学大系『平家物語下』（岩波書店）406頁。

以上のように、建礼門院は栄華の絶頂から絶望のどん底へと転じた自分の運命を仏教の六道輪廻になぞらえて、後白河法皇に語る。すなわち「清涼・紫震の床の上、玉の簾のうちにてもてなされ」と、中宮としてあった頃の天上界、西国にさすらった頃に、「人間の事は、愛別離苦・怨憎会苦共に我身に知られ」た人間界、そして船の中で暮らした頃、「みつきものもなかりしかば、供御を備ふる人もなし」という餓鬼道、一の谷の合戦以後の、戦いに明け暮れる「修羅の鬪諍、帝釈の諍」という修羅道、さらに壇の浦で見た地獄道、そして入水した安徳天皇などが竜宮城にいる、と夢見た畜生道をすでに経験した、と建礼門院は語る。それを聞いた後白河法皇は、異国の玄奘三蔵は悟りの前に六道を見たし、日本の日蔵上人は蔵王権現の力で六道を見た、と建礼門院の悲しみを慰めるのである。これが「灌頂巻」における「六道之沙汰」の主な内容である。

そして「灌頂巻」の末尾に、建礼門院の往生を語る「女院死去」がある。建久二（一一九一）年、建礼門院は病気にかかったので、いよいよ最期を迎えることになった。そこで彼女は阿弥陀仏の手にかけた五色の糸をとりながら、「南無西方極楽世界、教主弥陀如来、かならず引摂し給へ」（灌頂巻「女院死去」）³⁸と念仏しはじめた。「御念仏のこゑ、やうやうよはらせましましければ、西に紫雲たなびき、異香室にみち、音楽そらに聞ゆ」（同巻・同上）³⁹と、念仏の声が次第に弱ったところ、西に紫の雲がたなびいて、なんとも言いようのないすばらしい香りが室内に満ち、音楽が空の方で聞こえた。このような場面で、三十一歳であった建礼門院は、ついに「一期遂におはらせ給ひぬ」と、この世を去って、往生を遂げたのであった⁴⁰。

³⁸前掲書、408頁。

³⁹前掲書、408頁。

⁴⁰ 建礼門院の亡くなった年及びその年令については、『平家物語』の諸伝本、史料などによって少し異なっている。たとえば本論で扱っている『高野本』では、建礼門院の亡くなった年次が「建久二年きさらぎの中旬に」（「女院死去」）となっているが、『屋代本』では「女院遂ニ建久始ノ比」（巻第十二「法皇為女院閑居叡覧大原御幸事」）となっていて、類似している。これに対して、『延慶本』では、「御年六十八ト申シ貞応二年ノ春晚ニ」（第六末「建礼門院法性寺ニテ終給事」）となっている。一方、史書『歴代皇紀』に「建保元年十二月十三日

この臨終の場面を見た建礼門院に仕えていた女房たちも、「竜女が正覺の跡を追ひ、韋提希夫人の如に、みな往生の素懷をとげける」（同巻・同上）⁴¹というように、みな往生を遂げたのであった。

以上、『平家物語』における「灌頂巻」の主な内容を概略的に述べてきた。もっとも十三巻もある『平家物語』において、「灌頂巻」はそのうちの一巻にすぎない。これまで述べたところからうかがえるように、「灌頂巻」は平家一門が全滅した後、一人生き残った平清盛の娘である建礼門院が出家し、大原の寂光院に身を隠し、仏道にはげんでついに往生の素懷を遂げるまでのことを叙述したものである。

『平家物語』全巻の内容の上から考えてみれば、「灌頂巻」に語られている建礼門院の一生は、その父平清盛のような華かな一面もなければ、その兄重盛、知盛のような強さもない。それにもかかわらず、何故このごく単純な筋で、ほんの一巻しかない「灌頂巻」が特別な関心を催し、忘れがたい印象を読者に与えるのか。「灌頂巻」はいったい何を意味しているのであろうか、その背後にはまた何が潜んでいるのか、以下それについて述べてみよう。

3.

『平家物語』は鎌倉時代中期に成立したと言われているが、その内容は平安末期から鎌倉初期を背景とする。周知のように、日本では平安中期の律令制度の動揺から生じた社会秩序の混乱、及び災害、疫病の流行のために、死後阿弥陀仏の極楽浄土に往生することを説

五十七歳」が記されているが、『吾妻鏡』にはこのことが書かれていない。富倉徳次郎の解釈によれば、「灌頂巻」の内容は、本来は内容それぞれがこの巻十二の中に編年体的に見てしかるべき所に据えられていたため、『屋代本』の「建久始ノ比」とするのが編年体風に続いて好都合だったと考えられる。そしてそれがやがて『高野本』底本では、「建久二年きさらぎの中旬に」ということになったのである。さらに富倉は建礼門院の亡くなった年次は『歴代皇紀』に記されている「建保元年」が事実に近いと言っている。一方、佐伯真一は建保元年説が誤りで、『延慶本』の「貞応二年」説が妥当かと述べている。以上、『屋代本高野本対照平家物語三』（新典社）437頁、438頁、『延慶本平家物語下』（勉誠社）534頁、富倉徳次郎『平家物語全注釈下巻（二）』（角川書店）224-226頁、佐伯真一『平家物語下』（三弥井書店）405頁などを参照。

⁴¹新日本古典文学大系『平家物語下』（岩波書店）409頁。

く浄土教が流行した。浄土教の流行にしたがって、念仏によって日々の不安から逃れ、来世には極楽浄土に往生できることを願うことが貴族の間に広がった。特に当時源信は『往生要集』を著して、浄土思想の発展に画期的な意義をもたらした。

この著作において、源信は現世と来世とを対置し、現世の穢土はいわゆる三界六道の流転輪廻の世界であるから、穢土には地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六道が含まれ、その中の地獄の世界はさらに等活地獄ほか、黒繩、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、無間と八大地獄に分類され、これらの八地獄にはまたそれぞれ同じように十六の小地獄が付属しているとする⁴²。この世で罪を犯した者はみな地獄に堕ち行くことになっており、いかなる身分や権勢、財力を誇るものも、穢土の宿命を拒むことはできない。前節で触れた「灌頂巻」の「六道之沙汰」には、建礼門院が仏教の六道の世界を見たことが書かれていて、建礼門院が目にした地獄のようすを「叫喚・大叫喚のほのほの底の罪人も、これには過じとこそおぼえさぶらひしか」と、「叫喚・大叫喚」と言っているが、これは今述べた八大地獄の叫喚地獄と大叫喚地獄に当たるかと思われる。

現世の穢土とは対照的に、来世の浄土には阿弥陀如来、菩薩が迎える聖衆来迎の樂をはじめ、蓮華初開の悦びなど十種の楽しみ、いわゆる「十楽」がある。浄土では、瑠璃をもって地とし、金の縄で道の境を作り、七宝で厳かに飾られた宮殿、樓閣があり、それらの建物の内外にいろいろな宝石で作った池があつて、八功德の水をたたえ、その中にはさまざまな蓮が光り輝き、一々の華には菩薩が、光には化仏の姿がある。その外にもさまざまな宝樹があり、宝樹の

⁴²今日では、われわれは人と生まれているから、人界以外のところをすべて死後の世と捉えていて、地獄をよく死後の世界と考えているようである。しかし源信の『往生要集』においては、極楽浄土を死後の世界と見ているが、地獄を含む六道は現在の世界と解されている。そして八大地獄にせよ、それに付属している十六の小地獄にせよ、これらの地獄はすべて人間の住んでいる世界の地下にあるとされ、われわれが生前に犯した罪の種類や重さなどによって、それぞれの地獄に堕ちる、と源信は言っている。以上、『往生要素』巻上・大文第一「厭離穢土」の第一「地獄」（日本思想大系『源信』所収、岩波書店）11-29頁を参照。

上には七宝の宝網がかかっている。そして宝網の間には美しい花の宮殿があって、宮殿の中で天の童子が遊んでいる。この国に住むと、食べたいと思えば、美味しい品々が自然に現れ、衣服を替えたいと思えば、いつの間にか着替えていて、五官の喜びは言葉を費しても、語り尽くせないようである⁴³。「灌頂巻」には、建礼門院の寂光院の庵室の庭の風情を「軒にならべるうへ木をば、七重宝樹とかたどれり。岩間につもる水をば、八功德水とおぼしめす」(灌頂巻「大原入」)⁴⁴と語り、建礼門院が軒にならべる木を極楽浄土の「七重宝樹」に、岩間に積る水を「八功德水」になぞらえて慰めたと記している⁴⁵。この風景から建礼門院の欣求浄土の心境もうかがえると思う。

以上は『往生要集』における穢土と浄土についての描写である。それではわれわれはいかにしてこの何とも言いようのない喜びに包まれた浄土へ行けるのか。源信によれば、長い年月阿弥陀仏を信じ、深く念仏に心を寄せて往生極楽を願ってきた者が、臨終に当たって、阿弥陀仏が多く菩薩などとともに迎えを受けるのである。迎えに来る時、その者は歓喜の念に浸り、無念無想の安らぎに入って、聖衆に導き入れられて蓮台に坐す。その瞬間に、西方の極楽浄土に往生するのである。「灌頂巻」の「女院死去」には、建礼門院の臨終のようすを記して、「西に紫雲たなびき、異香室にみち、音楽そらに聞ゆ」と、阿弥陀仏が来迎する時の奇瑞を言っているが、それはすなわち『往生要集』に説いた「聖衆来迎の楽」ではないかと思われる。

以上のように、源信は『往生要集』の中で、穢土としての現世と浄土としての来世のありさまを鮮やかに描き出し、浄土の楽しさと穢土の恐しさを克明に説いている。特にその中の地獄の苦しみ、恐しさ、及びそこでさいなまれる罪人の苦しみの様相についての描写があまりに凄惨なため、かえって厭離穢土、欣求浄土の信仰を促進

⁴³浄土についての描写は、『往生要集』巻上・大文第二「欣求浄土」の第四「五妙境界の楽」前掲書、57-62頁を参照。

⁴⁴新日本古典文学大系『平家物語下』(岩波書店)394頁。

⁴⁵建礼門院の庵室の風景については、渡辺貞磨『平家物語の思想』(法蔵館)217、218頁を参考にした。

する結果となり、浄土教は全盛時代を迎えるに至る。治承元（一一五六）年から建久二（一一九一）年までを時代背景にした『平家物語』は、当時における浄土教の流行及び浄土思想の興隆をよく反映しているとも言えよう。

たとえば敗戦を理由に自分の手で自らの生命を断つ時、極楽浄土のある西に向って念仏しながら死んでいく武士の姿が見られる。治承四（一一八〇）年に、宇治の平等院で平清盛の軍勢に攻められて、もはや何の望みもないと分った時、源頼政は西に向って、高らかに南無阿弥陀仏と歌えながら、「埋木のはなさく事もなかりしに身のなるはてぞかなしかりける」（巻第四「宮御最期」）⁴⁶という歌を残して自刃した。それだけでなく、念仏しながら死のうとする武士の姿も見られる。前節で触れた入水自殺した清経でも維盛でも、彼らも念仏しながら死んでゆく。これらのことは当時の浄土思想の興隆を説明するのに、もっとも典型的な例であろう。

しかしもう少し立ち入って考えてみれば、以上あげた例は当時の浄土思想の興隆を反映するだけであって、当時の人々が死んでから極楽浄土への往生を期待していることを表わすにとどまっている。ところが、死がいかに美しいか、また死への憧れなどになると、今述べた例からうかがうことはできない。特に本論で論じようとする死の美学に関しては、その関連性を直接見出すことは不可能である。したがってこれまであげたいくつかの例だけでは、『平家物語』における死の美学を解説するのに、充分とは言えまい。そこで以下、前節で述べた『平家物語』末尾の「灌頂巻」を取り上げ、その最後に描かれている「女院死去」をめぐる、この作品に潜んでいる死の美学について述べてみることにしよう。

4.

前節では「灌頂巻」の「女院死去」に書かれている建礼門院の往生について述べたが、ここで特に注目される場所は、臨終に直面

⁴⁶新日本古典文学大系『平家物語上』（岩波書店）247頁。

した時の建礼門院の死に対する姿勢である。前節でも触れたように、建礼門院は阿弥陀像の手から引いた五色の糸をとって、「南無西方極楽世界、教主弥陀如来、かならず引摂し給へ」と念仏しながら往生を遂げているのであるが、この五色の糸の行儀の中には古い宗教的な態度が表われているとともに、彼女の往生の意識、及び阿弥陀仏来迎渴仰の切実な心情がうかがえる。以上のように、建礼門院には往生の意識及び阿弥陀仏来迎渴仰の心情を持っている故に、死に臨んだ時、彼女には死の恐怖がまったく感じられず、死の不安もぜんぜん見られない。死はまるで彼女のかねてからの望みのようで、彼女はずっとそれを待っていたかの如くである。だから死に直面した時、建礼門院は死後の浄土を念頭に置きながら、念仏のうちに極楽浄土に往生を遂げたのである。建礼門院だけでなく、彼女に仕えた女房たちもついに「みな往生の素懐を遂げける」というように、みな往生を遂げたとされている。

もっとも『平家物語』においては、往生についての記述は以上述べた建礼門院の死のみならず、ほかのところにもいくつか見られる。たとえば『平家物語』の巻第一には、平清盛に寵愛された祇王と仏御前のことが書かれている。祇王は仏御前のために平清盛に捨てられたのち、母のとちと妹の祇女とともに尼になり、嵯峨野の奥の柴の庵にとじ籠って修行生活をはじめた。祇王たちが出家してから一年もたたないうちに、仏御前もついにこの世の栄華をあきらめ、祇王のところにとちねて来て、いっしょに信仰生活に入った。結局「四人一所にこもりゐて、あさゆふ仏前に花香をそなへ、余念なくねがひければ、遅速こそありけれ、四人のあまども、皆往生の素懐をとげけるとぞ聞えし」（巻第一「祇王」）⁴⁷と、この四人の尼たちはみな往生の素懐をはたしたのである。

そして巻第十のところにおいては、千手前の往生のことが書かれている。寿永三（一一八四）年、平清盛の四男重衡は源頼朝に捕えられたが、首を斬られるまでに頼朝から一度の沐浴が許されたので、

⁴⁷新日本古典文学大系『平家物語上』（岩波書店）29頁。

その時千手前が入浴の手伝いに来て、彼女との一夜のむつびがある。その夜重衡は千手前を相手に横笛と五常楽を吹き、「灯闇しては、數行眞氏之涙」という朗詠を謡い、彼女との別れを悲しんだ。そして重衡が南都へ引き廻され斬られた後、彼に恋慕をした千手前はすぐさま姿を変え、信濃国の善光寺へ行って、「彼後世菩提をとぶらひ、わが身もつみに、往生の素懷をとげけるとぞ聞えし」（巻第十「千手前」）⁴⁸と、重衡の後世の往生を祈念し、自分自身も往生の素懷をとげたという⁴⁹。以上のように、『平家物語』における往生は建礼門院の死のみとは限らない。大野順一によれば、『平家物語』には「往生」という言葉が十四語ほど見出され、それがすべて「往生の素懷をとぐ」というふうには、「素懷」と結びつけて語られている⁵⁰。

しかしもう少し立ち入って考えてみれば、以上あげた往生、たとえば祇王と仏御前の往生にせよ、千手前の往生にせよ、彼女たちが往生の素懷を遂げた時には、阿弥陀仏などが迎えに来る、という衆聖来迎の場面も見つけられなければ、極楽浄土に往生するといったような華やかな場面を見出すこともできない。作品の上では、われわれは「後白河の法皇の長講堂の過去帳にも、「祇王・祇女・仏・とぢらが尊靈」と、四人一所に入られけり。あはれなりし事どもなり」（巻第一「祇王」）⁵¹、「往生の素懷をとげけるとぞ聞えし」（巻第十「千手前」）としか読めず、往生についての具現をうかがうことができない。これに対して、建礼門院は「西に紫雲たなびき、異香

⁴⁸新日本古典文学大系『平家物語下』（岩波書店）224頁。

⁴⁹佐々木八郎は『平家物語講評下』では、『吾妻鏡』に記されている重衡と千手前のことを取り上げながら、次のように述べている。つまり寿永三年、重衡が頼朝に捕えられて鎌倉まで護送され、頼朝に許されて沐浴し、千手前が重衡の徒然を慰めるため派遣されてきたことなどはすべて事実であるが、「今晚千手前卒去（年廿四）。其性太穩便、人人所惜也」（『吾妻鏡』第八「文治四年四月二十五日」）というように、千手前は病死した。ところが、『平家物語』では、作者は重衡に恋をした千手前を「彼後世菩提をとぶらひ、わが身もつみに、往生の素懷をとげけるとぞ聞えし」と出家して、重衡の菩提を弔い、彼女の往生の素懷をとげたことにした。ここで『平家物語』における戯曲的虚構が見られ、この物語の浄土教的虚構が見られる、と佐々木八郎が言っている。以上、国史大系『吾妻鏡第一巻』（吉川弘文館）297頁、及び佐々木八郎『平家物語講評下』（明治書院）160-164頁を参照。

⁵⁰大野順一『平家物語における死と運命』（創文社）147、148頁を参照。

⁵¹新日本古典文学大系『平家物語上』（岩波書店）29頁。

室にみち、音楽そらに聞ゆ」と、諸仏の来迎の奇瑞の中に、弥陀の引撰のもとで極楽浄土に往生を遂げたのである。同じ「往生」、同じく「往生の素懐をとげける」のに、何故建礼門院の往生にしか、このようなみごとな衆聖来迎及び成仏の場面が見えないのか。

ここでひとこと言わなければならないのは、『平家物語』においては、建礼門院の一生がもっとも変化に富んでいたとは言え、その晩年及び死は平家一門の中でもっとも羨むべきものであった、ということである。ここで平家一門の代表的な人物を何人か取り上げながら、このことを説明したいと思う。まず『平家物語』の主人公である平清盛の死から述べてみることにしよう。

5.

『平家物語』の巻第六には、主人公平清盛の死が書かれている。治承五（一一八一）年、六十四歳の平清盛は謎の熱病にかかって重態に陥る。臨終に際して、清盛は自分の死後、仏堂、仏塔を建てたり、仏事供事などをしたりせず、即刻討手を遣わし、敵である源頼朝の首を墓前に供えよと言い残し、「悶絶躡地して、遂にあつち死にぞしたまひける」（巻第六「入道死去」）⁵²と「悶絶躡地」の状態で、ついに悶死をとげた。

実は清盛が死ぬ前に、妻の二位殿は、清盛が治承四（一一八〇）年に重衡を大將軍として東大寺の大仏を焼き亡ぼした罪業によってこの熱病をわずらった、そのために、彼が死後無間地獄に落ちた、という夢を見た。ところが、清盛がはたして死んでから無間地獄に落ちたのかどうか、『平家物語』には触れられていないが、「四手の山、三瀬河、黄泉中有の旅の空に、たゞ一所こそおもむき給ひけめ。日ごろつくりをかれし罪業ばかりや獄卒となつて迎へに來りけん」（同巻・同上）⁵³というように、清盛は一人で死出の山、三途の川、冥途の旅の空に赴き、そこには日常この世で作ら犯した罪業だけが

⁵²前掲書、347頁。

⁵³新日本古典文学大系『平家物語上』（岩波書店）347頁。

獄卒となって迎えに来たことだろうか、と記述されている。そしてかつて「一天四海を掌ににぎって、上は一人をもおそれず、下は万民をも顧ず」（灌頂巻「女院死去」）⁵⁴と、日本全国に名をあげ、権威を振った平清盛は、火葬にされてから「身はひとときの煙となつて、都の空に立のぼり、かばねはしばしやすらひて、浜の砂にたはぶれつゝ、むなしき土とぞなりたまふ」（巻第六「入道死去」）⁵⁵と、体はつかの間の煙となつて都の空に立ち上り、遺骨はしばらくとどまって、浜のまさごにうちまじりつつ、はかない土となつてしまったのである。

平清盛が亡くなる一年ほど前に、その長男重盛は父に先立って病死した。平家一門の中で、重盛はもっとも優しく、よく反省をする人とも言える。重盛は死ぬ一年前に、「入道の悪行超過せるによつて、一門の運命すでにつきんずるにこそ」（巻第三「無文」）⁵⁶という夢を見て、その一門の運命がすでにつきつつあることを知っていた。そこで彼は清盛の悪心を和らげ、天下の安全を得ようとするため、「栄耀又一期をかぎつて、後混恥に及べくは、重盛が運命をつゞめて、来世の苦輪を助け給へ」（巻第三「医師問答」）⁵⁷と神に祈り、自分の生命を縮めて、来世の苦輪を助けてほしいと考える。

その後重盛は病気にかかり、いよいよ重態となつた。これを神様がすでに自分の祈願を聞き届けてくれたのだと思つた重盛は、治療を受けることを拒んで、ひたすら死期を待つ。このように、まだ四十三歳の盛りの年の重盛はついに病気で亡くなつた。『平家物語』では重盛の死について、「御年四十三、世はさかりと見えつるに、哀なりし事共也」（同巻・同上）⁵⁸と、哀悼の意を表わしている。そしてこの物語の語り手は重盛の死を偲んで、「世には良臣をうしなへる事を歎き、家には武略のすたれぬる事をかなしむ」（同巻・同上）⁵⁹と

⁵⁴新日本古典文学大系『平家物語下』（岩波書店）408頁。

⁵⁵新日本古典文学大系『平家物語上』（岩波書店）347頁。

⁵⁶前掲書、174頁。

⁵⁷前掲書、170頁。

⁵⁸新日本古典文学大系『平家物語上』（岩波書店）172－173頁。

⁵⁹前掲書、173頁。

言い、世人は重盛を失ったことを嘆き、平家は彼の死によって武略が弱体化したことを悲んだと述べる。ところが、重盛の死によって来世の苦輪が助けられたかどうかについては、この作品の上では明らかではない。その嫡男維盛、及びその後の平家一門の運命を見るかぎりでは、その苦輪が助けられたどころか、まったく助けられなかったとも言えそうに思われる。

先に、平清盛の四男重衡と親しんだ千手前の往生について述べたが、千手前と別れてから重衡は伊豆まで護送され、最後に奈良に送られた。死ぬ前に、彼は一度日野にいる妻北の方に会いたいので、警固の武士から暇をもらい、彼女に最後の別れをする。その時、重衡は涙ながらに「せきかねて泪のかゝるからころも後のかたみにぬぎぞかへぬる」と一首の歌を書き、「契あらば、後世にてはかならずむまれあひたてまつらん。ひとつはちすにといのり給へ」(巻第十一「重衡被斬」)⁶⁰と言った。そして「又こん世にてこそ見たてまつらめ」と言い置いて、北の方のもとを離れていく。

北の方と別れてからまもなく、重衡はいよいよ処刑となった。処刑に臨んだ時、重衡は自分が犯した罪があまりに深いので、仏を拝んで斬られたいと言った。そこで長年召し使っていた侍の木工右馬允知時はその辺りにあった阿弥陀仏を一体迎えてきて、その狩衣の袖のくぐり紐を解いて、そのまま仏の手にかけ、片端を重衡に持たせる。このように、重衡は紐を手につけ、仏に向かい「いま重衡が逆罪をおかす事、まったく愚意の発起にあらず。只世に随がふことはりを存斗也」(同巻・同上)⁶¹と、自分が犯した罪業が自発的なものではなく、勅命や父の命令には背くことをえなかったからであると言い、これまでの悪業を後悔した。そして重衡は「一念弥陀仏、即滅無量罪、願くは、逆縁をもって順縁とし、只今の最後の念仏によって、九品託生をとぐべし」(同巻・同上)⁶²と語り、高声に十念

⁶⁰新日本古典文学大系『平家物語下』(岩波書店) 335頁。

⁶¹新日本古典文学大系『平家物語下』(岩波書店) 337頁。

⁶²前掲書、337頁。

を唱え、首を差しのべて斬られた。時に重衡は年二十九、元暦二（一一八五）年のことである。

以上のように、重衡は死後極楽浄土への往生をめざし、妻北の方と来世には同じ蓮台の上に生れようと思い、高声に念仏しながら斬られた。ところが、阿弥陀仏の手にかけ、念仏しながら死んでいった重衡は望んだ通りに極楽浄土に往生したのか。『平家物語』にも書いてあるが、重衡が斬られてからその首は般若寺の大鳥居の前に釘づけに懸けられた。その後、北の方はその首と遺骸を日野へかっいで帰り、首も遺骸も火葬にして、骨は高野山に収め、墓を日野に築いた。北の方はその後尼姿となり、重衡の菩提を弔ったという。そして重衡の死について、「数千人の大衆も、守護の武士も、みな涙をぞ流しける」（同巻・同上）⁶³と、みな重衡に対して哀れを催している。ところで、話は本題に戻り、「後世にてはかならずむまれあひたてまつらん。ひとつはちすに」と祈り、「願くは、逆縁をもつて順縁とし、只今の最後の念仏によって、九品託生をとぐべし」と念仏しながら斬られた重衡は、死後はたして極楽浄土に往生し、北の方と一つの蓮の上にいるのか。『平家物語』の上では、以上あげたことの成否は分らないが、上述したところ、及び千手前も北の方もその余生を重衡の供養に捧げた、ということから考えてみれば、重衡はおそらく極楽浄土に往生しなかったのではないだろうかと思われるのである。

平重盛が亡くなったのは治承三年、一一七九年のことであるが、その嫡男維盛は寿永三（一一八四）年に入水自殺を遂げた。寿永二（一一八三）年、平家が都を落ちるに当り、重盛の嫡男であった維盛は、一門の人々とともに西国へ行く決めていた、しかし「ゆくゑも知らぬ旅の空にて、憂き目を見せ奉らんもうたてかるべし」（巻第七「維盛都落」）⁶⁴と、妻子に悲しい目を見せたくないために、維盛は妻子を都に残し留めて行った。妻子と別れてから維盛は「身が

⁶³前掲書、337頁。

⁶⁴新日本古典文学大系『平家物語下』（岩波書店）44頁。

らは八島にありながら、心は都へかよはれけり」(巻第十「横笛」)⁶⁵と、故郷に残した妻子のことが恋しく、忘れることができない。そのため、維盛は人目を忍んで屋島を離れて、都に上り妻子に会いたく思った。しかしもし捕えられて恥を受け父重盛の名をおとすおそれがあるため、苦しんだあげく維盛は高野山に行って出家した。そしてもうどこへも行く道がないのを悲観して、生きることができなくなった維盛は、ついに熊野の沖に入水することになる。

入水する前に維盛は妻子のことを思い出し、断ちがたい恩愛に苦しんだ。そこで滝口入道という僧侶は「生者必滅、会者定離は浮世の習にて候也。すゑの露、もとのしづくのためしあれば、たとひ遅速の不同はありとも、をくれ先だつ御別、遂になくてしもや候べき」(巻第十「維盛入水」)⁶⁶と、「生者必滅、会者定離」という憂き世の習いを教え、葉末にたまる露もその根元に落ちる水滴も、いずれはともにはかなく消えて行く運命にあることを述べ、さらに源氏の先祖伊与入道頼義の往生譚を語った。それを聞いてのち維盛はようやく決心をつけて、「西に向ひ手を合せ、高声に念仏百返斗唱へつゝ、「南無」と唱る声ともに、海へぞ入給ひける」(同巻・同上)⁶⁷と、西に向かって手を合わせ、声高く念仏を唱えながら海に沈んだ。時に二十七歳であった。

そして前節では元暦二(一一八五)年、壇の浦合戦の時、平家一門の最後を決定づけた安徳天皇が二位の尼に抱かれて、壇の浦に身を投げたことについて述べたが、その時二位の尼は「極楽浄土とて、めでたき処へ具しまいらせさぶらふぞ」、「浪のしたにも都のさぶらふぞ」と言い、安徳天皇とともに壇の浦に沈んだ。ところが、西に向かって念仏しながら壇の浦に沈んだ安徳天皇は、はたして浪の下の都の極楽浄土に行くことができたのか。『平家物語』では、入水した安徳天皇のことが次のように書かれている。安徳天皇が入水した

⁶⁵前掲書、224頁。

⁶⁶前掲書、239-240頁。

⁶⁷前掲書、241頁。

のは三月の春のことであったから、作品の上ではこの幼帝を「華」にたとえ、その死を「悲哉、無常の春の風、忽に花の御すがたを散らし、なさけなきかな、分段のあらき浪、玉体を沈めたてまつる」（卷第十一「先帝身投」）⁶⁸と悼み、深い悲しみを表わしている。ところで、入水した安徳天皇がはたして浪の下の極楽浄土にいるのかどうか、以上あげたところからはうかがえない。

そして「灌頂卷」の「六道之沙汰」において、安徳天皇のことが再び出てきて、建礼門院は安徳天皇が壇の浦に入水したのを見た時、あまりにも悲しんだので、いわゆる「叫喚・大叫喚」の「地獄界」にいたと述べている。その後、建礼門院は明石の浦で安徳天皇をはじめ、一門の公卿、殿上人が竜宮城にいならぶ、という夢を見て、自分がすなわち「畜生道」を経験したと言っている。ここで問題が出てくる。竜宮城とはいかなる所であろうか。安徳天皇がいる竜宮城ははたして浪の下の極楽浄土なのであろうか。

竜宮城はもとより海底にあるという竜王の住む宮殿であるが、仏典では竜は八部衆の鬼神の一人で、畜類とされることから、竜の世界にも苦があり、まだ畜生の苦を離れぬ所とされている。そのために建礼門院は竜宮城を「畜生道」にたとえ、自分がすでに仏教の六道を経験したと述べている。しかし竜宮城を畜生道にたとえ、「竜畜経のなかに見えて侍らふ。よくよく後世をとぶらひ給へ」（灌頂卷「六道之沙汰」）という二位の尼の話、及び建礼門院は「先帝聖霊、一門亡魂、成等正覚、頓証菩提」（灌頂卷「女院死去」）⁶⁹と、亡くなった安徳天皇の後生菩提を願い、平家一門の亡魂を弔う以上、竜宮城はけっして極楽浄土とは言えない。たとえ建礼門院が夢に見た竜宮城は「昔の内裏には、はるかにまさりたる所」（灌頂卷「六道之沙汰」）⁷⁰と、昔の皇居よりはずっと立派だと言っても、入水した安徳天皇ははたして極楽浄土に往生したのか、すこぶる疑いがある。

⁶⁸新日本古典文学大系『平家物語下』（岩波書店）295頁。

⁶⁹新日本古典文学大系『平家物語下』（岩波書店）407頁。

⁷⁰前掲書、405頁。

以上は『平家物語』における代表的な人物が死に至るまでの経緯である。これまで述べたところから分かるように、平家一門の主な人物はたいてい病死したか、斬られたか、または入水自殺によってその一生を終えている。平家一門がこのような悲しい運命をたどったのは、はたして「父祖の罪業は子孫にむくふといふ事、疑なしとぞ見えたりける」（灌頂卷「女院死去」）⁷¹によるものか、ここでは断言できないが、重盛が病死したことを除けば、前節に述べた宗盛、知盛の死をも含めて、清盛の子供と孫たちはほとんど盛りの年、若い年または幼い時、敵に攻められてその命を奪われ、この世を去っている。

もっとも人間である以上、誰もがみな死ななければならない運命を持っているのは確かであろう。たとえ死の到来を遅らせることがある程度可能でも、人間はやはりいつか死ななければならないから、死は人間にとって免れることのできない宿命である。しかしたとえ死が免れることのできない宿命としても、他人の逼迫によって自分の命を終えなければならないことは、何より悲しいことであると言わざるをえない。平家一門の男たちは概してこのような悲しい運命に遭ったのであるが、一方ただ一人生き残った女である建礼門院の場合はいかがであったろうか。

6.

一見したところ、建礼門院はまことに数奇な一生を過し、その一生はけっして恵まれていたとは言えないように思われる。何故ならば、かつての権力者平清盛の娘である建礼門院は、若い頃栄華な宮廷生活をして、まるで「天」界にいるようであったが、のちに人間、餓鬼、修羅、地獄、畜生、という六道の世界を体験して、最後に「住あらしめて年久しうなりにければ」、しかも「人跡たえたる程もおぼしめし知られて哀なり」というさびれた所にある寺尼で、「昼夜、朝夕の御つとめ、長時不断の御念仏」、「よひよひごとのあかの水、結ぶ」

⁷¹前掲書、408頁。

と、その晩年を送り一生を終えた。このようなみじめな晩年生活、特に栄華から没落へ、幸せから悲しみへの激変した運命は、十分嘆かわしものと言わなければならないであろう。

しかし視点を変えて考えてみれば、建礼門院の一生ははたしてみじめで悲しいばかりのものだったと言えるのか。特に戦乱が続いて、政権もすでに平氏から源氏へと転じ、世の中が常に不安という世に生き、平家一門がすべて破滅したという状況のもとで、出家循世をし、毎日「昼夜、朝夕の御つとめ、長時不断の御念仏、おこたる事なくて、月日を送らせたまひけり」、「よひよひごとのあかの水、結ぶ」、「暁をきの袖の上、山路の露もしげくして」という修行生活をした。このような生き方はみじめで悲しいばかりのものだったどころか、むしろ人々に羨まれるべきものではないかと思われる。富倉徳次郎の解釈を借りれば、このような修行生活をした建礼門院は、弥陀の救いの中に永遠の生命を得たとも言えるから、それは単なる敗北の姿ではなく、一つの勝利の姿だとも言えなくはないのである⁷²。

そればかりではなく、死に臨んだ時、建礼門院はさらに阿弥陀仏の手にかけた五色の糸をとりながら、「南無西方極楽世界、教主弥陀如来、かならず引撰し給へ」と、念仏のうちに死を迎える。そして「西に紫雲たなびき、異香室にみち、音楽そらに聞ゆ」という衆聖来迎の中に往生を遂げ、さらに仕えた女房たちも「みな往生の素懐を遂げける」と、ともにあの世まで供をする、という結末になる。浄土思想が盛んだった当時、平家一門がほとんど斬られたりみじめに死んだりして、一族が絶滅した状況のもとで、建礼門院は衆聖来迎の奇瑞の中でみごとに極楽往生を遂げ、さらに仕えた女房たちまでもがあの世までお供をしたというので、このような死の表現はこの物語におけるもっとも美しいところだと言うべきであろう。

すでに述べたように、死に直面した時、平家一門の多くの人々は死後極楽浄土への往生を目ざし、念仏のうちに死んでいった。前節で

⁷²富倉徳次郎『平家物語全注釈下巻（二）』（角川書店）194頁を参照。

も触れたように、たとえば建礼門院の兄であった重衡は、阿弥陀仏の手にかけた紐を取り、「逆縁をもって順縁とし、只今の最後の念仏によって、九品託生をとぐべし」（巻第十一「重衡被斬」）と、声高に念仏しながら死についた。そして建礼門院の甥であった維盛は、「西に向ひ手を合せ、高声に念仏百返斗唱へつゝ」（巻第十「維盛入水」）と、やはり声高に念仏を百遍ばかり唱えながら、海へ身を投げた。さらにその子の安徳天皇も、手を合わせ、「西にむかはせ給ひて、御念仏ありしかば」（巻第十一「先帝身投」）と、壇の浦に身を投げた。ところが、極楽浄土に往生を目ざし、念仏して死んでいった彼らのはたして往生を遂げたのか、作品の上からはうかがえない。これに対して、建礼門院だけが衆聖来迎の奇瑞の中で、弥陀の引摺のもとに極楽往生を遂げた。それ故建礼門院の往生を語る「灌頂巻」の「女院死去」を読むと、何とも言えない悲しみと喜びが湧き起こり、すこぶる印象に残る。これこそ『平家物語』全巻を通じて、もっとも印象深く、忘れがたいところではないかと思う。

ここで一言したいことがある。建礼門院ははたして本当に諸仏来迎の奇瑞の中で、弥陀の引摺のもとに極楽往生を遂げたか、この点は実は『平家物語』の諸伝本によって少し異なっている。たとえば読みもの系『平家物語』の『延慶本』では、建礼門院の往生が「貞応二年ノ春晚ニ、紫雲空ニタナビキ、音楽雲ニ聞ヘテ、臨終正念ニシテ、往生ノ素懐ヲ遂サセ給ニケリ」（第六末「建礼門院法性寺ニテ終給事」）⁷³と書かれている。これに対して、『屋代本』には「女院遂ニ建久始ノ比、竜女カ正覚ノ跡ヲ追ヒ、韋提希夫人ノ往生ノ素懐ヲ遂サセ給ケリ」（巻第十二「法皇為女院閑居叡覽大原御幸事」）⁷⁴としか書かれておらず、極楽浄土に往生した描写は見られない。以上のように、建礼門院がはたして極楽浄土に往生したかどうか、それは『平家物語』の諸伝本によって解釈も異なっている。

⁷³北原保雄、小川栄一編『延慶本平家物語本文篇下』（勉誠社）534頁。

⁷⁴麻原美子、春田宣、松尾葦江編『屋代本高野本対照平家物語三』（新典社）438頁。

ところが、『高野本』では建礼門院の死が「御念仏のこゑ、やうやうよはらせましましければ、西に紫雲たなひき、異香室にみち、音楽そらにきこゆ。かきりある御事なれば、建久二年きさらきの中旬に、一期遂におはらせ給ひぬ」（「女院死去」）⁷⁵となっている。そして『高野本』を底本とする『覚一本』では、建礼門院はたしかに「西に紫雲たなびき、異香室にみち、音楽そらに聞ゆ」という衆聖来迎の奇瑞中に極楽浄土に往生を遂げた。少なくとも『覚一本』の編著者はそう書いているとも言える。このような死に方は『平家物語』の作者たちが理想像として思い描いた死であったか、あるいはその時代の人々がそのように死んでほしいという期待にこたえて書かれたものだったかもしれない。いずれにしてもこのような死に方から当時浄土思想がいかに興隆したか、ということが察知できる。それと同時に、浄土思想にひそんでいる死の美学も具現されている。このような死を訴える浄土教的な死生観が建礼門院の往生を描く「灌頂卷」末尾の「女院死去」に表われていて、この作品を完結させるとともに、この物語におけるもっとも美しく、忘れがたい場面となっているのではないかと思う。

そして『平家物語』がほかの軍記物語より高く評価され、中世の代表的な軍記物語となっているのは、この作品が単に源氏と平氏との合戦、または平家一門の末路を語るのではなく、主人公平清盛及びその一門の人々を取り上げて、彼らが死に至るまでのことを次々と述べながら、その巻頭にある「祇園精舎」に語られる「盛者必衰」、「諸行無常」、「奢れる人も久しからず」、「たけき者も遂にはほろびぬ」などの理をも説明しているからである。この物語は「盛者必衰」、「諸行無常」などの理を主題としているが故に、物語全体が盛者の華やかさと敗者の悲しみとの二つの面を持つことになっている。この二つの面が一体となって作品のすみずみ流れているがゆえに、われわれは読む際、盛者から敗者へ貶められた悲しみ、及び「諸行無常」の感傷を深く感じるができる。このような特別な悲しみと

⁷⁵前掲書、437頁。

感傷は、『平家物語』を読む時、もっとも印象に残るところとも言える。

このような表現は『保元物語』、『平治物語』、『義経記』、『太平記』などと比べてみると、より生き生きとしていて感動的である。何故ならば、源為義、為朝を中心に保元の乱の顛末を描いた『保元物語』にせよ、平治の乱の顛末を記し、源頼朝による源氏の再興が最後に語られる『平治物語』にせよ、源義経の一生を中心に書かれた『義経記』にせよ、さらに南北朝の動乱を語る『太平記』にせよ、これらの軍記物語に共通してみられるのは、王権、朝威への関心であって、主人公たちがいかに政権を奪り取り、または政権が奪い取られて破滅していくかということである。だからこれらの作品において、われわれは盛者の華やかさまたは敗者の悲しみの一面しか見られず、両者を同時に読み取ることができないのである。これに対して、以上述べてきたように、『平家物語』は「盛者必衰」、「諸行無常」に基づく無常観を意図的に構想化して書かれたものである。だから栄華の絶頂に達して、末代までも栄えるかのように見えた平家一門は滅亡したのである。これこそ『平家物語』がほかの軍記物語より説得力があり、もっとも成功しているところではないかと思われる。

それだけでなく、この作品はさらに建礼門院の一生を取り上げ、その身を以て、仏教の六道の思想を語りながら、その冒頭に語られる「諸行無常」の理をも説明している。そして「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす」という序章の冒頭句に始まり、「西に紫雲たなびき、異香室にみち、音楽そらに聞ゆ」、「みな往生の素懐をとげける」と、建礼門院とその女房たちの往生を記す「灌頂巻」で閉じられる『平家物語』は、われわれに「生者必滅、会者定離」という習いをも教えている。たとえ若い時にどんな栄耀栄華な生活をして、いかに栄達したとしても、人間は結局死ぬべきものであるから、誰でもこの宿命から逃れることはできない。この「諸行無常」の世において、仏道にはげんで極楽浄土に往生することは、もっとも

羨望された生き方または死に方ではないか、といったようなことをも教えているのである。このように考えてみれば、『平家物語』の仏教文学としての性格を理解できるし、この仏教文学の作品におけるもう一つの主旨をもうかがいよう。

7.

最後に付言すべきなのは、もとより死はけっして楽なことではなく、往生はたやすいことではない、ということである。宗教の分野では死または死後の世界に関して、さまざまな解釈があり、死は必ずしも恐いものとはされていないが、現実的には死と往生はけっして簡単なことではないのである。何故ならば、われわれ人間は一生の間にただ一度しか死ねないものであるから、われわれにとって死はかつて体験とはなりえないことであるし、死後の世界も未経験的な存在であるため、現実においてはわれわれが体験とはなりえないことに不安を持っているのはごく自然なことであって、未経験的な存在である死後の世界に恐怖を感じるのもあたりまえのことであろう。事故死と自然死は別として、死に臨んだ時、われわれはこの世にいる親友から離れなければならないし、自分の好きなものをも捨てなければならない。特にわれわれは死に対して多かれ少なかれ不安または恐怖を持っているから、われわれ人間はなかなか未練を残さずに、この世を静かに去っていくことはできないのである。

死が楽なことではないと同時に、往生もけっしてたやすいことではない。というのは、浄土教の考えによれば、極楽浄土は西方十億土の彼方に存在するため、そこに往生するには、かなりの功德を積まなければならない。功德を積むというのは、普段修行にはげんで善根を積み、自らの努力によってその罪業を消し、はじめて往生極楽を得ることができるということである。これは他人の力によるものではなく、一種の自助努力による救済とも言えよう。このような思想は平安時代の浄土教の伝統に基づくものであり、平安時代

の自力的・功德主義的な浄土教信仰の表われと考えられる⁷⁶。平安時代の浄土教の精神を継承し、それを基盤として書かれている『平家物語』は、当然この宗教的な態度を伝承していると言えよう。

往生だけでも簡単なことではないが、女人往生はさらに困難である。もっとも平安時代の文学作品には、女人往生という思想はあらわには見えない。平安時代の仏教では、『法華経』の提婆品に竜女の正覚のことが見えるのが、女人成仏の唯一のものと言われている。それにしても竜女はまず男性に変成してから、成仏すると説いている。これに対して、中世に流行っていた浄土教で尊ばれた経文『観無量寿経』には、韋提希夫人が立派に女人往生したという話がある。韋提希夫人は子の阿闍世太子に幽閉されたが、釈尊に説法を請うて悟りを開き往生したという⁷⁷。以上のように、日本の古代から中世にかけて、女人往生の例はまったくないとは言えないが、以上あげたごくまれな例に限られていて、しかも仏教の経文にしか見えないのである。

ところが、これまで述べてきたように、建礼門院は五色の糸を取りながら、「南無西方極楽世界、教主弥陀如来、かならず引摂し給へ」と、念仏しながら死んでいった。そして念仏しながら死んでいった建礼門院は、「西に紫雲たなびき、異香室にみち、音楽そらに聞ゆ」と、極楽浄土に往生を遂げたのである。言うまでもなく、「昼夜、朝夕の御つとめ、長時不斷の御念仏」、「よひよひごとのあかの水、結ぶたもともしほるゝに暁をきの袖の上」という修行生活をして、その仏道精進の結果、建礼門院は徐々に菩提に近づいていったのであろう。それだけではなく、天、人間、餓鬼、修羅、地獄、畜生、という六道の世界をすでに経験した建礼門院は、自分が受けた苦しみとその仏道精神の結果として、その往生が実現されたのかもしれない。しかし視点を改めて考えてみれば、念仏によってはたして死後

⁷⁶ 平安時代の浄土教信仰は、渡辺貞磨『平家物語の思想』（法蔵館）131—135頁を参照。

⁷⁷ 女人往生については、久保田淳「女人循世」（『日本文学と仏教第四卷無常』所収、岩波書店）65—70頁を参照。

に極樂浄土に往生できるのであるか。

もとより「南無西方極樂世界、教主弥陀如来、かならず引撰し給へ」というこの念仏は、死に臨んだ時、死後の浄土を思いながら、そこへ往生する期待に死の不安を忘れるための臨終の念仏なのである。この臨終の念仏によって、死の恐怖と苦痛を和らげ、われわれをより楽にこの世から離れさせ、さらに往生の手助けをしてくれるのである。念仏によって、はたして死の不安と恐怖を和らげ、死後に極樂浄土に往生できるのか、これはおそらく宗教に対する信念、または普段自らの修行、功德などにもかかわっているであろう。しかし上述した建礼門院の死からうかがえるように、死後の浄土を念頭に置いて、念仏しながら死んでいくことは、すべての者に往生の可能性が開かれていることを教えてくれるのである。

念仏は、それによって、すべての死が往生であることを暗示しているだけではなく、それと同時に、死に向う時、われわれはどのようにして死の不安と恐怖を和らげ、いかに死をのり超えるか、そして往生への手引きは何であろうか、といったようなことをも教えてくれるのではないか。このように考えてみると、「灌頂巻」に描かれている建礼門院の往生には、われわれ現実の死を理想化しようとする意図が働いていて、死を美化しているような傾向があるように思われる。だから死に直面した時、建礼門院とその女房たちは死への恐怖も不安もぜんぜん見られず、まるでかねてからの望みが叶うように「往生の素懐をとげける」と、往生の素懐を遂げたのである。そして本来困難とされた女人往生も、建礼門院たちの往生によってはたされたのである。

言うまでもなく、このような死に方の背後には、厭離穢土、欣求浄土の思想が潜んでおり、浄土思想の興隆から日本人の死生観に影響を及ぼしたものと考えられる。しかし『平家物語』の「灌頂巻」において、私は死がどれほどの安らぎであり、またいかに美しく、そして死すなわち往生が、単なる往生としてではなく、素懐された往生として語られているという浄土教的な死生観を見た。このよう

な死をうたう死の美学は本論で論じた『平家物語』のみならず、時代が下がるとともに、近世の武士道にも影響し、武士道文献『葉隠』にある「大名の御死去に、御供仕候者一人も無之候ては、さびしきものにて候」（『聞書』一ノ十二）⁷⁸となり、さらに近松門左衛門の心中物『曾根崎心中』にある「鐘の響の聞きをさめ、寂滅為楽とひびくなり」（「曾根崎心中徳兵衛おはつ道行・夢の夢こそ哀れなり」）⁷⁹となり、町人と遊女の心中を助長し、近世日本人の死生観に大きな影響を与えた。それと同時に、日本文学に見られるこの種の死の美学は、今日でも日本文化の中でそれなりの重要性を占めており、現代日本人の死生観の形成にも引き続き大いに機能して、はかり知れない影響を与えていると思う。

参考文献

1. 麻原美子・春田宣・松尾葦江、『屋代本高野本対照平家物語』、東京：新典社、1993。
2. 梅原 猛、『地獄の思想』、東京：中央公論社、1967。
3. 大野順一、『平家物語における死と運命』、東京：創文社 1966。
4. 北原保雄・小川栄一、『延慶本平家物語本文篇上・下』、東京：勉誠社、1990。
5. 佐々木八郎、『平家物語評講上・下』、東京：明治書院、1963。
6. 佐々木八郎、『増補平家物語の研究』、東京：早稲田大学出版会、1967。
7. 佐伯真一・福光晃・小林美和、『平家物語上・下』、東京：三弥井書店、2000。
8. 佐藤泰正、『文学における死生観』、東京：笠間書院、1996。
9. 相良 亨、『日本人の死生観』、東京：ぺりかん社、1984。
10. 高島元洋、「近世武士における死と時間の意識」、講座『日本思想

⁷⁸ 日本思想大系『葉隠』（岩波書店）224頁。

⁷⁹ 諏訪春雄校注『近松世話物集』（角川書店）39頁。

- 4時間』所収、東京：東京大学出版会、1984。
11. 津田左右吉、『文学に現はれたる国民思想の研究第一・二巻』、東京：岩波書店、1973。
12. 富倉徳次郎、『平家物語全注釈上・下巻』、東京：角川書店、1968
。
13. 村松 剛、『死の日本文学史』、東京：中央公論社、1975。
14. モーリス・パンゲ著・竹内信夫訳、『自死の日本史』、東京：筑摩書房、1986。
15. 渡辺貞磨、『平家物語の思想』、京都：法蔵館、1991。